

茶の湯文化学会会報 No.1

第1号 / 1994年5月10日 発行 茶の湯文化学会
〒606 京都市左京区下鴨森本町15 生産開発科学研究所内
TEL. 075-702-9270 FAX. 075-702-9313

発刊にあたり

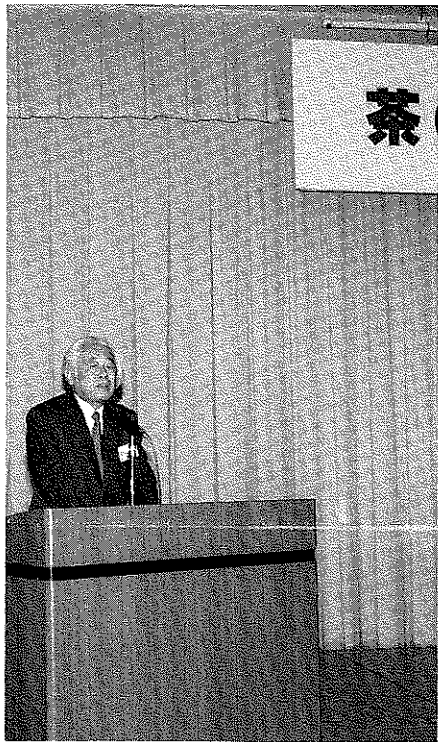
茶の湯文化学会会長 中村昌生

昨年11月発足いたしました茶の湯文化学会は、去る2月12日、会則により平成5年度の総会・大会を開催いたしました。

6世紀の歴史をもつ茶の湯の文化は、今や国の内外からその魅力に熱い目なさが注がれております。これまで学問の諸分野で研究が進められ、

それぞれ貴重な成果を挙げてきましたが、複雑多岐な構造をもつ茶の湯文化の特質の解明には総合的な学問研究の場が必要で、そうした学界の要請に応じて当学会

は設立されました。茶の湯文化を日本文化の究極と位置づけ、さらに深く学問研究を展開するためには、従来の学問の枠組を超えてさまざまな分野で茶の湯文化に関心をもたれる多くの方々の御参加を得ることが必要であります。



平成五年度総会における中村会長の挨拶

幸いに学会の設立に御賛同たまわり、呼びかけ人となって下さいました先生方、発起人の諸先生方の御支援のお蔭をもちまして、現在会員数は、約八百人に達しております。

目下会誌「茶の湯文化」第1号(平成5年度分)は、今秋の配布を目ざして鋭意編集作業を進めております。会則に定められております会誌の刊行は、年一回ですが、この他に会員の皆様への報告、お知らせ等を載せる会報を随時発行することにいたしました。

した。本号には昨年の設立総会と記念講演および大雪に見舞われた2月の総会における議事の報告、そして柳田聖由先生の記念講演及びシンポジウムの概要などを纏めました。会員の皆さまの学会活動への積極的な御協力を期待して発刊の御挨拶といたします。

「茶の湯文化学会」

発足までの経緯

平成四年夏頃から倉沢行洋氏を始めとして中村昌生、林屋晴三、村井康彦、熊倉功夫、筒井紘一氏ら、茶の湯文化の各分野の研究者が集まって学会設立のための準備を始めた。かねてから専門分野を超えた茶の湯の総合的な研究の必要性が叫ばれていたことに応えてみようとしたのである。

そのために十数度の会合を重ねて、趣意書、会則案の作成、発足に向けての「呼び掛け人」の依頼、「呼び掛け人」から発起人への呼び掛けなどがおこなわれた。

これらの準備がある程度ととのつた平成五年十月十六日、多数におよぶ発起人の賛同を得て、京都市中京区の烏丸京都ホテル三階、「瑞雲の間」で、午後三時三十分より発起人による設立総会が開催された。

設立総会

総会はずまず筒井紘一氏(茶道資料館副館長)の司会によってはじめられ、議長および副議長を選出。議長には上平貞氏(京都市立美術館々長)、副議長に倉沢行洋氏(神戸大学教授)を選出。上平議長による開会宣言がおこなわ

れ、熊倉功夫氏(国立民族学博物館教授)から発足までの経過報告が行われた。

続いて審議にはいり、赤沼多佳氏(茶道資料館学芸部長)より会則案が提案されて、これを承認。さらに熊倉功夫氏から第一回総会までの期間、会務を行う役員について提案があった。役員については正式な理事会が発足するまでの経過措置として、会務を代行する理事代行を選ぶ事とし、その結果、理事代行の代表には中村昌生氏(京都工芸繊維大学名誉教授)を、理事代行には林屋晴三、村井康彦、倉沢行洋、筒井紘一、熊倉功夫、赤沼多佳の各氏が選出された。

最後に理事代表代行に選出された中村昌生氏から、平成六年二月十二日の総会・大会開催、会誌「茶の湯文化学」の創刊、発起人の皆さんへの会員勧誘要請、事務局を各理事代行及び委員として谷 晃、日向 進、谷端昭夫氏で構成する旨の挨拶がなされ、総会を終了した。

記念講演

午後四時三十分より発起人に入会希望者を加えた記念講演会。竹内順一氏(五島美術館学芸部長)の司会により、村井康彦国際日本文化研究センター教授の「茶の湯研究の回顧と

平成五年度総会および大会

平成六年二月十二日午後一時より、京都市左京区の「ホリデイ・イン京都」内「ホリデイ・イン・ホール」で平成五年度の総会及び大会が開催された。当日は、前夜から降り続いた雪がやまず、午前中には京都市内でも数十センチの積雪となり、新幹線を始めとする交通機関は大きな混乱をきたした。これにもかかわらず、全国から約三百人の参加をみた。

総会

総会は筒井紘一氏の司会で始められ、議長として上平貞氏、副議長に倉沢行洋氏を選出。理事代行代表の中村昌生氏から、これまで各分野別に研究を行い、茶の湯の総合的な研究の場がなかった。今日、研究者ばかりではなく、茶の湯の実践者を含めた茶の湯文化学会が発足したが、開かれた学会としてこれから本格的に活動を開始するので、力を合わせて学会を盛り上げていきたい旨の挨拶があった。つぎに赤沼多佳理事代行から発足までの経過報告および平成五年度事業案並びに予算案が提案され、総会、大会の実施、会誌の発行、理事会で計画される各種事業の概要が承認された。



平成五年度総会の様子

役員選出

さらに熊倉功夫理事代行から役員を選出について提案があり、1歴史・文化、2建築・庭園、3美術工芸、4哲学・文学、5中国・育種などの各分野から二十五名の理事候補を推薦。さらに会長(一名)、副会長(二名)、監事(二名)を選出した旨、及び将来的には「参与」の選出を行いたい旨の提案があり、その結果、会長に中村昌生氏(京都工芸織

展望)、林屋晴三(東京国立博物館名誉館員)の利体の茶具」が行われ(要旨は別掲)、設立総会の幕を閉じた。

その後、午後六時三十分から約百名が参加して懇親会が開催された。永島福太郎氏(関西学院大学名誉教授)、小堀宗慶氏(遠州流家元)らの祝辞があり、茶の湯文化学会の発足と今後の発展を祈った。



平成五年度総会の懇親会で祝辞を述べられる永島福太郎氏

維大学名誉教授)、副会長には倉沢行洋氏(神戸大学教授)、林屋晴三氏(東京国立博物館名誉館員)、村井康彦氏(国際日本文化研究センター教授)が、さらに理事および監事が選出された。理事・幹事は次の各氏である。(敬称略)

(理事) 赤沼多佳、尼崎博正、伊藤延男、稲垣栄三、影山純夫、木下政雄、熊倉功夫、高橋忠彦、高橋康夫、竹内順一、武田恒夫、谷 晃、谷端昭夫、筒井紘一、徳川義宣、戸田勝久、中村二柄、榑崎彰一、西 和夫、橋本 実、久田宗也、日向 進、堀 信夫、三崎義泉、吉村元男

(監事) 赤井達郎、伊藤郁太郎

平成五年度学術大会

続いて平成五年度の大会に移る。まず記念講演。柳田聖山花園大学国際禅学研究所々長による「風狂と数奇」(要旨は別掲)、その後「創生期における茶の湯の世界」をテーマとしたシンポジウム(要旨は別掲)が行われた。谷 晃氏(野村美術館)の司会によって佐藤 豊三氏(徳川美術館)、高橋康夫氏(京都大学)、竹内順一氏(五島美術館)、堀内明博氏(京都市埋蔵文化財文化研究所)が出席。これをもって大会を終了した。引き続き懇親会が行われ、会員相互の交流を深めた。

「茶の湯研究の回顧と展望」(要旨)

村井康彦(国際日本文化研究センター教授)

これまで幾度か行われた利休の年忌ごとに茶の湯の高まりがあり、研究が進んだと考えることもできます。

その最初の高まりは元禄三年の利休百回忌。新興町人の成長期であり、千家では祖堂が作られ、利休回帰の風潮が高まった時期です。さらに『南方録』の発掘、茶書の刊行では『茶話指月集』など教訓の書、『茶道便蒙抄』など啓蒙書、『源流茶話』など茶を通して人倫道徳を教える聖教などがあらわれて茶の湯研究が高まります。この後、特に注目されるのは昭和十五年の利休二百五十年忌に発行された創元社版『茶道』全集です。『それまでの茶の湯研究の最初の結集(けつじゅう)』で、突出してレベルが高まりました。

茶の湯には、これまで明治維新、第二次世界大戦の敗戦という大きな試練の時期がありました。この二つを茶の湯は近代数寄者の登場と近代学校制度で乗り切りました。その結果、女性が茶の湯を支える大きな基盤になって行きます。

利休居士の茶具とはどういうものであったかをご認識していただきたいと思っています。利休居士は、唐物・書院茶に共感を示したのではなく、当初からわび数寄りという美意識の中で自分の茶を進められた様子が道具の上からみえるような気がします。

その利休居士が最も尊敬されたのは墨蹟であります。なかでも大徳寺龍光院の密庵威傑の墨蹟は利休居士の表具で、墨蹟をいかに意義深いものにさせるかという思いで色合いを選んで表装されたわけであります。

これこそ利休居士の思いの世界から出た茶碗で、長次郎の「一文字」です。挽木鞘など見立ての茶碗から深化したもので、一碗の茶を喫するときにどうあるべきかという思いの中で成立してきたものだと思います。

今日庵に所蔵される「尺八」ですが、竹花入の原点で、一本の竹との出会いのなかで出来上がったもので、実に微妙な間合いのなかで出来上がっているものです。これを「待庵」の床に掛けると、利休居士の最後の思いがひしひしと伝わってくるのではないかと思います。

(講演は数十枚のスライドを使用して行われ、その内から幾らかを選んで要旨を収録しました。)

伝統文化とは「通時代性を獲得した民族文化、或いは国民文化」だといえます。さらに伝統文化というのは、その一国内、或いは一民族の中では、一つの普遍性を獲得した文化であり、普遍性を持ったことが時代を超えていく一つの力になりました。

最近、中国・韓国・台湾などで研究が高まり、「茶の湯」というのが日本文化を理解する上で不可欠のもの」という認識が強まっています。今後は日本人と外国人の共同研究の持つ意味が強まるでしょう。

さらに日本史、東洋史、西洋史、民族学、文化人類学、育種学、哲学、美学、考古学などを加えた「学際的な研究」によって茶の湯がさらに深まりを持つでしょうし、『茶道古典全集』『元伯宗日文书』など史料の公刊が、研究を大きく前進させた事からすれば、「基礎的な史料の整理、公刊、出版」を茶の湯文化学会でも進めることが必要です。

日本文化の中における茶の湯の位置付け、或いは茶の湯に日本文化というのが、どういう風に具現されているか、ということをかきとんと理解する、それを様々な分野の様々な立場の人が研究している、そういう場というものに、この学会はなるべきだと思います。

平成五年度大会記念講演

「風狂と数奇」(要旨)

柳田聖山(花園大学国際神学研究所学長)

「露地」「草庵」という言葉は『法華経』にもとめることができるが、茶湯が見出した露地、草庵とは大きな隔たりがあり、その違いには大きな課題が潜んでいる。

『法華経』の放蕩息子の喩え話に出てくる草庵は、暮らすには不向きな粗末な小屋である。そのような草庵を茶の湯は見出し、人間の住まいの理想の集積として磨きをかけてきた。露地については、火の手の上だった屋敷から父親が息子達を玩具の車で誘って安全な露地へ導き出すという喩え話に出ている。露地は、文明や文化が持っている危機的要素を根源のところで越えるような自然であるといえるが、このことに茶の湯の文化は初めてはつきりと視点をおいた。露地、草庵の課題は環境文明論としてとらえることができると思う。

『法華経』が提起したものの達し得なかった課題を禅仏教が引き出したのだが、禅仏教の日本における新しい展開は、一休とその晩年に周辺で発生する茶の湯、能楽、連歌などの数奇の文化に見られる。

一休の『狂雲集』は「風狂」を大きなテーマ

「利休の茶具」(要旨)

林屋晴三(東京国立博物館名誉館員)

私の利休居士の茶具に対する体験は、昭和二十年代末、「大黒」という長次郎の茶碗に出会ったことに始まります。

その後、『茶の美術』の公刊や一九八〇年に行った東京国立博物館での「茶の美術」展、利休居士四百年忌に際して京都国立博物館での「千利休展」などで、利休居士の道具が極めて個性的で突出した、何か深い思いの中で作られていることを体験しました。

このなかで利休居士の道具は中世的な室町時代の美意識の終着点で、それを出発点にして織部・遠州といわゆる近世の茶具の展開があったと感じていたわけでございます。

今日は利休居士の晩年の美意識が濃密にあらわれている茶具の中から、利休居士の茶の湯の在り方をお話してみたいと思います。

私は一九七〇年代後半頃から文献を離れて、利休居士の道具を通してその茶を考察しつづけ、あくまで利休居士の茶具における美的表現の中で利休居士を見詰めてきたのです。

そのような私の体験から、利休居士の息のかかった、まず疑いがないものを取りあげて、



記念講演をされる柳田聖山氏

とする。風狂、つまり狂気を装うことで、休は自分の世界をつくりあげたが、『狂雲集』の世界に新しい花を添えるのが「数奇」であった。「数奇」は「好」の当て字で中国の「数奇」とは関係がないというが、不運をあらわす中国語の「数奇」に重ねられていると思う。数奇とは不幸になることを承知で好きになることであり、放蕩息子の喩えは風狂と数奇という二つの日本の美意識の祖であるといえる。

中国と日本という文明の大きな違いをとらえ直すことによって、「和漢の境を紛らわす」という段階に到った珠光の時代によく新しい体系を見つかることに成功したのである。詫び数寄の根底に風狂をおいてみることは、さまざまな人類の文明を解きほぐす大きな鍵になるのではなからうか。

シンポジウム概要

総会および、記念講演に引き続き開かれたシンポジウムは、日向進（京都工芸繊維大学教授）・谷端昭夫（裏千家学園講師）・谷晃（野村美術館学芸課長）の三委員が担当し、「創生期における茶の湯の世界」のテーマのもとに佐藤豊三氏（徳川美術館学芸課長・御成研究）、高橋康夫氏（京都大学助教授・都市史）、竹内順一氏（五島美術館学芸部長・陶磁史）、堀内明博氏（京都市埋蔵文化財研究所考古学）の四氏がそれぞれの専攻の立場から発表と討議を行った。

佐藤氏は室町將軍の御成における室札の系譜と座敷飾り、高橋氏は京都を例にとつて数寄空間の形成と「市中の山居」の出現、竹内氏は唐物の受容と伝存、そこに和物と高麗物が加わった「名物」の選定、堀内氏は発掘成果から復元した十五、六世紀の都市景観と生活の諸相についてスライドを使用しながら発表された。

以上の発表をふまえた討議では、会所と禅院の方丈との類似性、『若台観左右帳記』や『御飾書』に見る会所飾りやその意味、唐物主体の「数寄道具」と「茶の湯道具」との差、出

土遺物における輸入陶磁器の変遷などについて議論が交わされた。

時間の制約があり議論を深化させるまでには至らなかったが、これからの茶の湯研究の方向や視点がいくつか提示された。



シンポジウム風景

事務局報告

*学会活動広報のための会報第一号をお届けします。今回は、総会・大会号。記念講演の要旨などを収録のため、特に六頁立となりました。講演の要旨は会報担当者で作成し、文責は会報担当委員にあります。いずれ、会誌『茶の湯文化』に収録される予定ですので、詳細は会誌で御覧ください。会報は今後、年間四回程度の発行を目指しています。

*総会の折りにもお知らせしましたが、事務局の住所は、「二六〇一京都市左京区下鴨森本町十五 生産開発科学研究所内 茶の湯文化学会」で、電話は〇七五（七〇二）九二七〇、FAX番号は〇七五（七〇二）九三二二です。事務局には毎週月・火・木曜日、午前十時から午後五時まで宮川伸子さんが詰めています。会務のため席をはずす事も多く、留守番電話を設置しています。ご連絡には郵便やファックスなどをご利用ください。

*平成六年度の会費振り込み用紙を同封いたしますので、お振り込みますようお願い致します。

振替口座番号は京都二一九四一六です。